

第14章 ガウス和, 相互法則の別証明

14.1 ガウス和

前にも述べたように, 平方剰余の相互法則には様々なタイプの証明があるが, この章ではガウス和による証明の概略を述べる.

自然数 n に対して, $\zeta_n = e^{\frac{2\pi i}{n}} = \cos \frac{2\pi}{n} + i \sin \frac{2\pi}{n}$ とする.

補題 14.1 奇素数 p と整数 s に対して

$$\sum_{a=0}^{p-1} \zeta_p^{as} = \begin{cases} 0, & p \nmid s \text{ のとき,} \\ p, & p \mid s \text{ のとき} \end{cases}$$

が成り立つ.

証明 $p \mid s$ のときは明らかだから, 以下, $p \nmid s$ を仮定して, 和が 0 になることを示す. 恒等式 $X^p - 1 = (X - 1)(X^{p-1} + \cdots + X^2 + X + 1)$ に $X = \zeta_p^s$ を代入して

$$(\zeta_p^s - 1) \left(\sum_{a=0}^{p-1} \zeta_p^{as} \right) = \zeta_p^{sp} - 1 = 0.$$

s が p の倍数ではないから, $\zeta_p^s - 1 \neq 0$ であり, 示したい式を得る. \square

補題 14.2 奇素数 p に対して, $\left(\frac{a}{p}\right) = -1$ をみたす整数 a が存在する.

証明 写像 $f: (\mathbf{Z}/p\mathbf{Z})^\times \rightarrow (\mathbf{Z}/p\mathbf{Z})^\times$ を $f(a) = a^2$ によって定義する. もし, すべての a ($1 \leq a \leq p-1$) に対して $\left(\frac{a}{p}\right) = 1$ ならば, f は全射である. $(\mathbf{Z}/p\mathbf{Z})^\times$ は有限集合なので f は単射でもあるはずだが, $f(\bar{1}) = \bar{1} = f(\overline{-1})$ および $\bar{1} \neq \overline{-1}$ より矛盾である. \square

補題 14.3 p を奇素数とすると, $\sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = 0$ が成り立つ.

証明 前補題のような整数 a をとれば, a は p と素だから, $t = 1, 2, \dots, p-1$ のとき, at の $\mathbf{Z}/p\mathbf{Z}$ における剰余類は, $\bar{1}, \bar{2}, \dots, \overline{p-1}$ 全体にわたる. したがって,

$$\sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{at}{p}\right) = \left(\frac{a}{p}\right) \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = - \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right).$$

よってこの和は 0 であり, 示したい等式を得る. \square

定義 14.4 奇素数 p に対して,

$$\tau_p = \sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{a}{p}\right) \zeta_p^a$$

と定め, これを p に関するガウス和という.

命題 14.5 p を奇素数とすると, $\tau_p^2 = (-1)^{\frac{p-1}{2}} p$ が成り立つ.

証明 まず,

$$\tau_p^2 = \left(\sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{a}{p}\right) \zeta_p^a \right) \left(\sum_{b=1}^{p-1} \left(\frac{b}{p}\right) \zeta_p^b \right) = \sum_{a=1}^{p-1} \left(\sum_{b=1}^{p-1} \left(\frac{ab}{p}\right) \zeta_p^{a+b} \right)$$

の最右辺内側の和について, $b = at$ とおけば, $b = 1, 2, \dots, p-1$ のとき, t の $\mathbf{Z}/p\mathbf{Z}$ における剰余類は $\bar{1}, \bar{2}, \dots, \overline{p-1}$ 全体にわたるから,

$$\tau_p^2 = \sum_{a=1}^{p-1} \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{a^2 t}{p}\right) \zeta_p^{a+at} = \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) \sum_{a=1}^{p-1} \zeta_p^{a(t+1)}.$$

ここで, 補題 14.1 から

$$\sum_{a=1}^{p-1} \zeta_p^{a(t+1)} = \begin{cases} p-1, & t = p-1 \text{ のとき,} \\ -1, & 1 \leq t < p-1 \text{ のとき} \end{cases}$$

がわかるから, 補題 14.3 より

$$\tau_p^2 = - \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) + \left(\frac{p-1}{p}\right) p = \left(\frac{-1}{p}\right) p.$$

よって, 第1補加法則 (定理 12.7) より命題を得る. \square

14.2 相互法則の別証明

まず, q が奇素数なので, 命題 14.5 より, τ_p^{q-1} は整数であることに注意する. 命題 14.5 とオイラーの規準より

$$\tau_p^{q-1} = (\tau_p^2)^{\frac{q-1}{2}} = (-1)^{\frac{p-1}{2} \frac{q-1}{2}} p^{\frac{q-1}{2}} \equiv (-1)^{\frac{p-1}{2} \frac{q-1}{2}} \left(\frac{p}{q}\right) \pmod{q}.$$

よって、以下に示す命題 14.6 より

$$\left(\frac{q}{p}\right) \equiv (-1)^{\frac{p-1}{2} \frac{q-1}{2}} \left(\frac{p}{q}\right) \pmod{q}.$$

両辺とも ± 1 だから等号が成り立ち、相互法則の証明が完了する。

命題 14.6 p, q を相異なる奇素数とすると、

$$\tau_p^{q-1} \equiv \left(\frac{q}{p}\right) \pmod{q}$$

が成り立つ。

証明 集合

$$R = \{c_0 + c_1\zeta_p + c_2\zeta_p^2 + \cdots + c_{p-1}\zeta_p^{p-1} \mid c_0, c_1, \dots, c_{p-1} \in \mathbf{Z}\}$$

を考える。 R は次の性質をもつ。

(R1) R は和、差、積について閉じている； すなわち、 $\alpha, \beta \in R \Rightarrow \alpha + \beta, \alpha - \beta, \alpha\beta \in R$ 。

(R2) $R \cap \mathbf{Q} = \mathbf{Z}$ 。

(R1) は簡単に確かめられるが、(R2) の証明はかなり難しい。ここでは、これらを認めて証明を続ける。さて、2項定理を繰り返し用いれば、一般に

$$(x_1 + \cdots + x_n)^q = x_1^q + \cdots + x_n^q + qf(x_1, \dots, x_n),$$

が成り立つことがわかる（ただし、 $f(x_1, \dots, x_n)$ は整数を係数とする x_1, \dots, x_n の多項式）。したがって、(R1) より、ある $\alpha \in R$ があって

$$\tau_p^q = \sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{a}{p}\right) \zeta_p^{aq} + q\alpha$$

と書くことができる。さらに、

$$\sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{a}{p}\right) \zeta_p^{aq} = \sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{aq^2}{p}\right) \zeta_p^{aq} = \left(\frac{q}{p}\right) \sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{aq}{p}\right) \zeta_p^{aq} = \left(\frac{q}{p}\right) \tau_p$$

と変形できるから、

$$\tau_p \left(\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) = q\alpha.$$

ここで、命題 14.5 より $\tau_p^2 = \pm p$ であり、これは q と互いに素だから、 $\tau_p^2 x + qy = 1$ をみたす整数 x, y がとれる。よって、

$$\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) = (\tau_p^2 x + qy) \left(\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) = q\alpha \tau_p x + qy \left(\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right)$$

と計算され, $\beta = \alpha \tau_p x + y \left(\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p} \right) \right)$ とおけば, (R1) より $\beta \in R$ であって

$$\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p} \right) = q\beta$$

とまとめられる. ここで, 左辺は整数だから $\beta \in R \cap Q$ であり, したがって (R2) より, $\beta \in \mathbf{Z}$. ゆえに示したい合同式が得られた. \square

—— 相互法則の別証明終わり ——

最後の授業, 記念写真を撮りました.



2017年1月13日 北1号館401教室にて撮影

最後まで聴いてくれて, ありがとう, さんきゅー, めるしー, だんげ, ぐらっついえ, ぐらしあす, おぶりがーど, すばしーば, しゅくらん, しえしえ, かむさはむにだ, ...